研　修　等　報　告　書

沼田市議会議長　様

令和　8年　4月10日

会派名　　沼　田　創　生　会

政務活動費を使用した研修等について、下記のとおり実施しましたので報告いたします。

記

1	期　　日	令和7年11月19日（水）～20日（木）
2	場　　所	香川県　三豊市
3	研修等のテーマ	・三豊市視察研修
4	参加議員	小野塚、桑原、中村、木内、齋藤、相澤
5	研修概要	①研修目的、②研修内容等を記入（別紙で研修資料及び写真等を添付）

概　要：研修　講師

○新しい商店づくり　　講師：今川宗一郎氏（地元企業家）
　既存事業を地域の交流拠点に転換

○地域移住による柔軟な働き方と地域循環　　講師：横山裕一氏（移住起業家）
　農家・不動産業と連携して副業としての農家経営

○アートバンク事業
　空き店舗を活用し地域経済の波及に向けた文化活動の取組

○ファンドを利用した空き家の再生
　地元事業者が不動産業を兼業し空き家をリノベーション販売することで人口増へ

○おむすび座
　子育て世代のママを中心とした食事を伴う交流拠点

会派名		沼田創生会	委　員　名	小野塚正樹
1	期日	令和7年11月19・20日		
2	調査事項	香川県三豊市		
3	所感	調査後の考察（感想、政策提言、本市にどのように活かせるか　など）を記入		

1視察の目的三豊市で100を超える地域プロジェクトが立ち上がり、行政・民間・住民・移住者が複層的に関わる独自の地域循環モデルを形成している。この成功要因を調査し、沼田市の地域活性化施策へ反映することを目的とする。

2　三豊市の概要（成り立ちと父母ヶ浜SNS戦略）

・三豊市の成り立ち

2006年に7町が合併して誕生。人口は減少傾向にあったが、地域資源の再評価と市民協働と移住者のプロジェクトを軸に「小さな経済圏の連鎖」を形成。住民主体のプロジェクトが連続的に立ち上がる土壌を作っている。

・父母ヶ浜ＳＮＳ戦略

鏡面の夕景が撮影できる海岸として若者のSNS投稿が爆発的に増加。市は投稿を阻害しない方針を取り、撮影サポート・清掃・PR導線を整備。SNS自然拡散による地域ブランド化の成功例となった。

3　視察講義・プロジェクト概要

以下、講義・現地説明で把握した内容をレポートしますが、あまりに多くのプロジェクトの説明を受け、こちらの限度を超えてしまいました。（反省）

---

(1) 古田秘馬氏：キーマンによる概要説明・資金調達と運営

地域資源を可視化し、小規模の事業者や住民を巻き込む伴走型支援を実践。補助金依存を避け、クラファン・共同出資・事業連結で小さな経済循環を作り、リスクを分散して挑戦を加速していた。

---

(2) 地元スーパー2代目の挑戦：宗一郎コーヒー、豆腐屋

家業のスーパーに留まらず地域を活性化させるため、コーヒー焙煎や豆腐製造を新たに展開。地域雇用の創出と若者の働き場づくりを目的に、店舗の多機能化と商品開発を行い、既存事業を地域の交流拠点へ転換していた。

・地域活性化の地元の立役者的存在がこの方でした。

---

(3) 地元不動産業：空き家活用と新しい価値創出・移住促進

空き家の管理を移住者に依頼する代わりに家賃無料で住んでもらう仕組みを構築。移住者は農業や地域仕事を手伝いながらリモートワークを続ける。三者が得をする新しい地域循環モデルとして機能。

・自社の利益にとらわれず循環の中でお金ではない利益を出す取組み

---

(4) 高校1年生の問題定義：学生と大人をつなぐマッチングサイト

高校生が企画した「大人に助けを求めるマッチングサイト」を運営。地域の課題解決に学生が主体的に参加し、大人の知識・人脈を活用する仕組みが生まれ、世代を越えた協働モデルを提示していた。

・まさか、高校1年生から活動のプレゼンテーションをうけるとは思ってもいませんでした

---

(5) 牛丼チェーン店役員の移住：副業で地ビール醸造と店舗開設

全国チェーンの元役員が移住し、副業としてクラフトビール事業を立ち上げ。豊かな自然と食文化を活かし、地産地消の飲食店も運営。都市部で得たノウハウを地方で再投資する好例となっている。

・大企業の役員が副業に挑戦するほど、スタートアップしやすい土壌

---

(6) 料理人を目指す若者支援：居酒屋開業

志ある若者の挑戦を地域が支援し、居酒屋開業を実現。物件提供、地域メンターによる伴走、クラファン支援を組み合わせ、若者が挑戦しやすい土壌づくりが進む三豊らしいプロジェクトである。

・料理ができるが場所や資金、ノウハウがない方をフォローして開業

（7）教育委員会：新たな教育プログラムの実行

地域企業・NPO・クリエイターと協働し、探究学習やローカルプロジェクト学習を推進。子どもたちが地域課題に向き合い、実社会での学びを得られる構造を教育現場に組み込んでいる。

・教育委員会が概念の枠を超えて授業や部活動として地域の課題解決を取り組んでいる

（8）CAMPFIRE 役員：クラウドファンディングの実態と三豊市の成果

小規模事業や個人の挑戦を後押しするクラファンを積極活用。三豊市では成功率が高く、地域全体で支援し合う文化が定着。資金調達だけでなく、仲間集めやマーケティング効果が大きいと報告。

・三豊市にクラファンが集中しているので視察に訪れたら、プロジェクトの多さに感激し、移住していた

（9）WED デザイナー移住：農家×不動産×デザインの新しい働き方

デザイナーが移住し、農家や不動産事業者と連携して複業を展開。地域の課題をデザインで再編集し、新たな価値や収益源を生み出す。地方移住による柔軟な働き方と地域循環の好事例。

・沼田でも取り入れたい働き方の参考になりました

（10）三豊市「暮らしの大学」での講義

市民や移住者が学び合う教育拠点。起業・農業・デザイン・地域づくりなど多様な講座があり、参加者同士のネットワークが新規事業創出に直結。学びを地域の実践へつなげる仕組みが特徴。

（11）アートバンク事業：ワークショップと地域連携

アーティストの作品貸し出しと地域展示を行い、創造性を街中に拡げる取り組み。住民とアーティストの交流機会が生まれ、文化活動が地域経済にも波及する新しい公共アートの仕組み。

（12）地元建材店：保育カフェと建材事業の連携

建材店が子育て世代を支える保育カフェを運営。建材知識を活かし、安全で居心地の良い空間を提供。地域の子育て支援と事業の融合という、三豊らしい複合型サービスモデル。

子育てママのサロン的なカフェでした。カフェ自体は赤字だそうですが、居心地の良い空間を求めて、新築を依頼する若夫婦が狙いだそうです。

（13）建材店によるチョコレート事業

建材店が地元食材を使ったチョコレート製造に挑戦。異業種連携でブランド価値を高め、地域土産の新たな柱を創出。小規模事業の多角化と地域経済の裾野拡大につながっている。

ショールーム的な空間は廃材からできていて、さらに地場産のカカオからチョコレートと名産品に取り組んでいた

（14）車での移動時間を活用した市内説明

移動中もプロジェクトや地域経済の仕組みを解説。市職員・伴走者がリアルタイムで疑問に答え、市内を走りながら地域の経済圏やつながりを体感できる構成となっていた。

4　視察からの学び・感想（文の意図を保持して再構成）

三豊市では短時間で非常に多くのプロジェクトを見聞きし、時間が足りないほど密度の高い視察となった。特に印象的だったのは「資金の集め方」と「地

域循環の仕組み」だった。

従来の行政主導や補助金中心とは異なり、
“自分たちが持っている資源を持ち寄り、交換し、循環させて価値を生む”
という全く新しいモデルが構築されている。

例として、不動産業者・移住者・農家の三者で成立する循環モデルがある。

- 空き家を管理する代わりに移住者は家賃無料で住む
- 移住者は農家の作業を手伝いながら
  リモートワークで生計を立てる
- 農家は人手不足を補える
- 不動産業者は空き家の維持費を節約できる

一見、どこでお金が生まれるのか疑問に思うが、結果として三者が得をし、移住者が貯金までできる仕組みが成立している。三豊市ではこうした“嘘のようなイノベーション”が、普通に成立している。

沼田市で同じモデルを即時に展開することは難しい。しかし、一歩でも着手することが重要であり、地域の空き家、移住、農業、子育て支援、教育などと結びつければ、新しい経済循環の可能性が広がる。今回の視察を踏まえ、一般質問でも取り上げ、沼田市の地域循環戦略の第一歩としたい。

会派名		沼田創生会	議　員　名	桑原　敏彦
1	期　　日	令和7年11月19日（水）20日（木）		
2	調査事項	①　香川県三豊市視察		
3	所　　感	調査後の考察（感想、政策提言、本市にどのように活かせるか　など）を記入		

① 香川県三豊市視察

「民間事業者の連携が生んだ地域内循環ビジネス」

香川県三豊市では、ここ数年で父母ヶ浜という浜がウユニ塩湖のようだということがSNSの効果で、観光客が100倍になると同時に、多くの1棟貸しの宿泊施設ができてきました。

「URASHIMA VILLAGE」は、大型の外資のホテルが来るという噂が流れた中、地元の100年企業などを中心に様々な業種の企業が11社集まり、共同で出資をして宿泊施設として開業しました。年間稼働率も60%を超え、観光客の増加と共に順調に推移しています。

その事業を手掛けたのは、瀬戸内ビレッジ（株）代表取締役の古田秘馬氏です。

瀬戸内ビレッジは、交通、建築、家具製造など、三豊市内の11の事業者が株主となり、それぞれに関係する業務を担っています。

「一社では不可能でも、連携により地域内でもこういうプロジェクトができるという、地域内循環ビジネスになってほしい。」と、古田氏は言っていました。

具体的な事業展開は、2018年10月にオープンした「UDON HOUSE」。讃岐うどんで有名な香川県で、空き家だった古民家を改装し、讃岐うどんをつくって学ぶ体験型宿泊施設です。そして父母ヶ浜での活動としては、「宗一郎珈琲」をオープンさせました。

各地域で、一人一人が自助に取組み、市役所が公助で支える中、多くの若者が三豊市に集結し、それぞれの起業を考えていました。

今回の視察で感じた事は、沼田市も三豊市のような企業間の連携による地域内循環によるビジネスを行い、活性化につなげる事だと強く感じました。

会派名		沼田創生会	議員名	中村浩二
1	期　日	令和7年11月19日（水）～20日（木）		
2	調査事項	三豊市の暮らしの大学等における移住者の各起業について		
3	所　感	調査後の考察は下記のとおり（感想、政策提言、本市にどのように活かせるかなど）を記入		

3．所管、調査後の考察等

1）目的

地方創生の成功事例と行政と民間の役割の側面から研究いたしたく、今回は三豊市の暮らしの大学等における移住者の各起業について、本市のまちづくりの参考とするため行政調査を行うものであります。

2）感想

三豊市は人口５７，１９１人（R７．９．１現在）面積２２２，８９㎢、香川県の西部に位置し、愛媛県や高知県に近く瀬戸内海に突き出た荘内半島と豊かな田園地帯を有しております。

交通関係も高松自動車道や国道１１号、３７７号、ＪＲなどの各駅があり、利便性の高いまちであります。

海上では国際貿易港の詫間港とマリンレンジャーの盛んな仁尾港の２つを有しているところであります。

平成１８年に７つの町が合併し現在に至っている風光明媚なまちであると感じました。

3）調査概要

１９日（水）

場所：瀬戸内暮らしの大学にて

開会：１３：００　挨拶兼講師　古田秘馬氏（三豊市に移住し、先祖の墓地までも移す）

グローバル＝コミュニティなまちづくり、高付加価値を他付加価値へ

うどんハウス＝香川県仁尾町、公助・共助・自助の共助は近助

父母ケ浜を中心に活性化を図るが役所等に頼らない（支援金、交付金、補助金は制限がありすぎて、自由が利かないかも）しかし、若者の移住者による起業は増加している

古田氏は今までのプロジェクトは１００を超え、４０社以上の法人設立３０億円以上を民間へ投資している事業家であります。

特に行政等からの補助等は受けず事業展開し、若者が集まってきており起業している仲間が集う大学であります

この暮らしの大学から新しい商店街、自分達のまちを自分達でつくる意識が芽生えてきているとのことであります。

１４：００　講師　今川宗一郎氏（地元起業家）

新しい商店街づくり（身の丈商店街）仁尾町等が寂しくなってしまい、スーパーを経営し移動販売も行っており、宗一郎コーヒーも手掛けているが、売り上げよりも店があってほしい気持ちから町の活性化をめざしている。

内向的や外交的の中間からコミュニケーションが取れるローカルプレイヤーが必要である。

この考えは、東京に合わすのでなく、東京にないものをつくる（東京から来た人達が東京と同じものがあったのでは新鮮味がない）このようなところへ若者は集まる。

１５：１５　講師　横山裕一氏（移住起業家）

農業経営、耕作放棄地等を畑にリフォーム、主にブロッコリを生産、半農半Ｘ＝半ローカル。移住してくる若者を雇う。

１６：５０　父母ケ浜視察

地元の人達が清掃し、夕日のきれいな砂浜にして人気のスポットとなる。

移動販売店等が出店。

１７：２５　小林結志氏（香川高専１年生）

学校（学生）と大人の協力でまちづくりの実現を目指す。学生のうちに地元の町に溶け込んで卒業後に再度町に戻り起業する、又町を出ても町に戻るような起業家の育成。

１７：５０　田島はやて（移住起業家）

くらしの交通として行政の運行のない時間帯を運行する民間交通を始める。移動手段のない地域の人々の移動の可能性を広げたい。居住地等から目的地をつなぐシャトルバス。なんでも相談に応じてきたシルバー人材では最近対応しきれていないため、なんでも相談サポートを開設し、２０分１０００円でシニア等へのサポート対応をしている。

１８：２５　島田真吾（地元の材木屋へ就職：不動産屋を兼ねる）

空き家を住居以外にコンバージョンし提供、空き家をリノベーションして販売など、つくるファンドから人口を増やす。育てるからスモールビジネス化していく。継続させることから不動産をファンドが購入し貸し付ける（想定利回り２パーセント、投資特典利回り１６．３パーセントなどで厚遇。

家も仕事も人もコミュニティも紹介する不動産屋、移住や定住は不動産屋から始まるをモットーとする。

○終了後に宿泊場所であるウラシマビレッジへ

２０日（木）

１０：４５（アートバンク：空き家である銀行の支店を利用）

誰もが絵を自由に描くスタジオにて、それぞれのテーマを出されて、それに沿った絵を描き、その絵を違う人達が絵だけで空想し、最後に絵を描いた本人が発表するなどユニークなアートバンクの起業家とプレゼンを行う。

１２：００（おむすび座：空き家である古民家を改修）

若い女性スタッフのみで経営、主に小さい子供連れを対象にしたおむすび屋さんで、昼食をとりながら見学

４）政策提言・活用等

１９日の１９：００～食事をとりながら、三豊市教育センター長のプレゼン、群馬県藤岡市出身者のプレゼンなど多くの方と意見交換をさせていただき非常に移住者の熱気を感じました。

空き家を利用しての町の活性化のため起業している方達は皆移住者であり、活気があると感じました。

古い、細い道路の両脇の民家はほぼ空き家状態ですが、昔の昭和レトロ調の古町的な状態でした。その古民家的な空き家を利用し、焼き鳥屋、手作りビール工房、スナックなどを経営し若者の活気を感じました。特に起業家が連携し、農業を週３日勤めながら自分の起業も経営するなど仲間意識の醸成などを感じました。このように違う業種でありながらも互いに協力しあうことが重要と考えます。

起業を目指す若者があまり制限や規約等に縛られない自由な発想のもとでの起業を支援できるような制度を私たちも提言していかなければならないと考えます。

なによりも三豊市仁尾町のような若い起業家を育成できる瀬戸内暮らしの大学のような制度から始めることが活性化のためのまちづくりの起点でると考えます。

三豊市の移住者による起業も中心となる古田秘馬氏の存在が大きいと思います。やはり誰かが中心になり、若者を育成し、リードして仲間を増やすことが活性化につながるのではないでしょうか。

以上のことから本市のまちづくりのため提言していきたいと考えます。

行政調査報告書

令和7年 12 月 25 日

会派名		沼田創生会	委 員 名	木内 修一
1	期　日	令和7年 11 月 19 日(水)～20 日(木)		
2	調査地	香川県三豊市		
3	調査事項	新たな「国土形成計画」の中核である「地域生活圏」のモデル事例		

4 【所感】

○(地域生活圏・二地域居住の取組を踏まえて)

今回の視察を通じて、人口減少社会における地域づくりは、単なる「定住人口の確保」から、「関係人口を含めた多様な関わりの創出」へと大きく転換していることを強く実感した。

特に、三豊市における取組は、行政主導にとどまらず、民間や地域住民が主体的に関わることで、持続可能な地域運営を実現しようとしている点に大きな特徴がある。

二地域居住やシェアハウスなどの仕組みにより、都市部人材の流入と地域内の活力創出が同時に図られており、「住む・働く・関わる」といった多様な関係性を柔軟に受け入れている点は、今後の地域政策の重要な方向性であると感じた。また、空き家の利活用や地域資源を活かした仕事づくり、生活サービスの維持に向けた工夫など、個別施策が点ではなく「面」として機能していることが、地域生活圏形成の鍵であると認識した。

○課題認識(沼田市との対比)

本市においても、人口減少・高齢化が進行する中、特に山間地域では、交通・買い物・医療など生活機能の維持が大きな課題となっている。しかしながら、現状は

・定住促進中心の施策に偏りがち

・空き家や地域資源の活用が十分に連動していない

・外部人材との関わりが限定的

といった状況が見受けられる。今後は、「住む人」だけでなく「関わる人」をどう増やすか、また、地域の中と外をどうつなぐかが重要である。

○沼田市への提案

① 「沼田版・地域生活圏」の構築

沼田市においても、生活機能(交通・医療・買い物等)を維持するためのエリア設定と、官民連携による運営体制の構築を進めるべきである。特に、利根地区・池田地区など山間部においては、拠点集約とサービス連携の視点が不可欠である。

② 二地域居住・関係人口の戦略的受入れ

都市部との距離的優位性を活かし、「週末滞在」「ワーケーション」「副業型関係人口」など、段階的な関わり方を受け入れる仕組みを整備する。単なる移住促進ではなく、“関わり続けてもらう仕組み”の構築が重要である。

③ 空き家を核とした拠点づくり

空き家を単なる住宅としてではなく、シェアハウス・交流拠点・起業・副業の場として複合的に活用することで、人の流れと仕事を同時に生み出す拠点整備を推進すべきである。

④ 地域資源を活かした「仕事づくり」

森林文化都市の理念と共に、本市の強みである果樹・米・こんにゃくなどの農業資源と観光・体験を組み合わせ、外部人材も関われる「稼げる地域づくり」を進める必要がある。

⑤ 官民連携プラットフォームの構築

行政単独ではなく、民間事業者・地域団体・外部人材を巻き込んだ「地域づくりの共創基盤」を整備することが重要である。

※まとめ

今回の視察を通じて得られた最大の示唆は、「地域は、住む人だけで支える時代ではない」という点である。多様な関わりを受け入れ、人と地域がゆるやかにつながり続ける仕組みこそが、これからの持続可能な地域づくりの鍵である。本市においても、従来の延長線上にとどまることなく、関係人口を含めた新たな地域政策へと踏み出すことを強く提案する。

会派名		沼田創生会	委　員　名	齋藤育子
1	期　　日	令和７年１１月１９日(水)～２０日(木)		
2	調査事項	香川県三豊市に学ぶ		
3	所　　感	調査後の考察（感想、政策提言、本市にどのように活かせるか　など）を記入		

～地域プロデューサー　古田秘馬さんを中心とした地方創生の在り方について～

《受講内容》

○新しい商店づくり　講師：今川宗一郎氏（地元企業家）
既存事業を地域の交流拠点へ転換、町にない店を新規オープン。

○地域移住による柔軟な働き方と地域循環について　講師：横山裕一氏（移住起業家）
農家や不動産業と連携して耕作放棄地等を畑にリフォームするなど、副業としての農家経営。
週３回１日３時間の労働の対価として、家賃光熱費が掛からない住宅の提供。

○なんでも相談サポートを開設　講師：田島はやて氏（移住起業家）
地域交通における行政と民間の連携、シニア等への生活サポートを目的とした「なんでも相談サポート」の開設

○アートバンク事業
空き店舗を活用したアーティストの作品展示と地域展示を行うなど、地域経済の波及に向けた文化活動の取組、子どもの居場所づくりにも活用。

○ファンドを利用した空き家の再生
地元の事業者が不動産業を兼業し、空き家を住居以外にコンバージョン・またリノベーションして販売することで人口増につなげる

○おむすび座（地域の子育て支援と事業の融合）
建材店が知識を活かした安全で居心地の良い空間を提供、子育て世代のママを中心とした食事をともなう交流拠点。

【所感】

わずか５，０００人の観光客だった父母ケ浜が南米ボリビアのウユニ塩湖のようだと評判になり、５０万人にまで爆上がりしたまちとして知られているが、これは単に「インスタ映え」ということだけではない。

決して交通の便も良いとは言えないまちが全国から注目を集める理由は、三豊のまちづくりに取組む方々が提唱する「身の丈資本主義」という思想と、まち自体が巨大なインキュベーターであり、続々と小さな挑戦が生み出されていることにあると感じた。

この「身の丈資本主義」とは、外部の大資本や補助金に依存せず、地域の人が自分たちの範囲で資本を出し合い、自由に挑戦するスタイルだ。そこには移住者の挑戦も大いに含まれている。そこに刺激を受けた地元の青年の企業や老舗の新しい業態への挑戦など、「自分たちの金でやる。補助金に依存しない」このシンプルな原則が、まちづくりの主体を市民へと取り戻したように思う。例えば若手経営者たちが１人１０万円ずつ出資して拠点をつくる。少額でも「自分たちの金」を投じれば、そこに当事者意識が芽生え、プロジェクトは個人の挑戦から「みんなの夢」へと変わるという好循環を生み出しているということだ。

昨今の地方創生とは、地域を盛り上げたい地元の方々と、地域でビジネスチャンスを掴みたい、田舎暮らしを楽しみたいといった移住者の力も欠かせないものと強く感じる。

しかしながら、やはり圧倒的な指導者や事業の中心者の存在が懸念される。地元の人材育成を強化しながら、三豊市のように地域プロデューサーといった方が関わっていくのか、その点も十分な協議が必要とされる。

今回の視察にあたり、それぞれが地域を盛り上げる熱意を感じたが、心に残っているのは移住者である若干１７歳の少年だ。彼は自分の意思で地元を離れ、新しい環境に飛び込んで来たそうだ。お金ではない価値を経験することに理解興味を示している少年の言葉に深く感銘した。

都会にはないもの、経験できないこと、まず本市が地域と移住者の双方にとってどれだけ魅力のあるまちとなり得るのか、本市を代表する名所や地域資源を活かしたまちづくりを進めるにあたり、三豊市の事例も取り入れる必要があると思う。

会　派　名	沼田創生会	議員名	相澤宗利
1　期　　日	R7 年　11月 19日(水)　～　R7 年　11月 20日(木)		
2　調 査 事 項	三豊市行政視察		
3　所　　感	調査後の考察(感想、政策提言、本市にどのように活かせるか　など)を記入		

香川県三豊市への行政視察は、人口減少社会の中で地域がどのように自立し、民間活力と行政機能を組み合わせながら持続可能な地域経営を実現しているかを学ぶことを目的として実施したものであり、今回の視察では、ローカリズムとキャピタリズムを融合させる独自の地域づくり、観光資源の磨き上げ、空き家・空き店舗の戦略的活用、若者や移住者を支えるベーシックインフラの提供、商店街の再生、宿泊業のローカルIPO、教育・人材育成、福祉・交通・住まいを包括的に捉える仕組み等、極めて多岐にわたる取組を確認することができた。三豊市では、10年前から民間主導の持続可能な地域経営を志向し、いわゆる補助金依存ではない「自分たちの暮らしは自分たちでつくる」という思想のもと、小さな事業を複層的に立ち上げ、それらを連動させることで、従来の地方都市では見られない経済循環を生み出してきたことが特徴である。具体的には、地元企業11社が出資し、自前のホテルを建設して黒字化した後にアセットをファンドに売却するというローカルIPOモデルを構築し、金融商品としての利回りだけでなく「泊まれる権利」を株主に付与することで、地域の関係人口を継続的に生み出す仕組みを確立しており、これは外資系ホテル誘致により地域の決定権を手放すのではなく、地元が主体として資本を握り続けるための戦略的判断であると説明を受けた。また、「うどんハウス」に象徴されるように、観光政策においては「なんでもある観光地」を志向するのではなく、「一点突破型」の価値創造に徹底しており、駅から徒歩30分という立地であっても世界40か国以上から客が訪れるなど、「ここでしかできない体験」の磨き上げが持つ力を再認識した。これらの事例は、沼田市が歴史文化、真田氏の物語性、大正ロマンといった地域資源を、より尖らせた観光商品として編集していくべき重要性を示している。

さらに、三豊市では「ベーシックインフラ」と称される、住居・仕事・つながりを包括的に提供する仕組みが存在し、農業法人「瀬戸内ファーミング」が週3日・朝3時間の農作業を条件に家賃・光熱費無料の生活環境を提供し、そのほかの時間で飲食店、建築、福祉施設など地域の仕事を柔軟にマッチングすることで、移住者や若者が地域で生活基盤を築きながら多様なキャリアを模索できる環境を整えている。これは単に働き先を提供するだけでなく、「地域で暮らす入口」としての機能を担っており、空き家や空き部屋を生活インフラとして活用する点で、沼田市の空き家問題の新しい解決視点となり得る。また、商店街再生では、空き店舗を民間が購入し、出資者は商店街内のシェアハウスを一定日数使える権利を持ち、テナント選定にも参加するなど、行政ではなく市民と民間が意思決定主体となる「第二の行政」とも呼ぶべき構造が築かれていた。教育分野では「暮らしの大学」が運営され、ゲストハウス運営・ファイナンス・事業計画・DAO的組織運営などの実践型講座が設置されており、最終回には金融機関が同席し、実際の融資審査につながる仕組みや、受講者からは1億円規模の事業が生まれるなど、人材育成と実際の事業実装が一体化している点が印象的であった。加えて、高専生の起業プロジェクト支援など、10代から地域と交わり、課題と自分の「やりたいこと」を接続していく仕組みがあり、これは沼田高校での探究学習との親和性が高いと感じた。

福祉・交通・住まいの領域では、コミュニティバスなどの赤字事業を単体で評価するのではなく、医療費・介護費の削減効果を含む「包括的コスト」で考えるという視点が導入され、Wi-Fiセンサーによる高齢者の見守り、生活リズムの変化の検知、買い物・片付け・解体など「日常寿命」を支える多様な支援ニーズに応える仕組みが存在し、その担い手として子育て世代・移住者・若者などが関わる循環構造が形成されていた。空き家問題についても、単に空き家バンクで待つのではなく、不動産事業者が所有者に直接アプローチし、「貸せない理由」「売れない理由」を一つずつ解決していく積極的な姿勢が重要とされており、材木店が自ら宿泊施設を建設し需要を創出するなど、地域プレイヤー自らが市場をつくる姿勢が強く感じられた。

今回の視察を通じて最も強く印象に残ったのは、「課題解決から始めると課題のせいにして終わる。自分たちが本当にやりたいことから始める」という言葉であり、これはまさに文化芸術によるまちづくりを掲げる私自身の理念と深く重なるものである。三豊市の事例は、アートやカルチャーの文脈を越えて、地域の人々が「自分たちの暮らしを面白くする主体」であり続けるための仕組みづくりが中心に据えられており、行政はその動きを阻害しないよう制度・データ・安全網を整える「黒衣(くろご)」として存在するという構造が確立している。この視察で得た知見は、沼田市が目指す「文化芸術による価値創出」と「稼ぐ行政」を両立させるための具体的な示唆に富んでおり、ローカル資本による宿泊施設や商店街再生ファンドの検討、空き家をベーシックインフラとして活用する若者受け皿の整備、暮らしの大学型の人材育成プログラムの創設、関係人口を外交的に増やすローカル外交官育成、移動・福祉・住まい・観光を一体で捉えるDX基盤の整備、そして文化芸術を核とした複数の拠点形成など、多方面で今後の政策形成に応用できると考える。人口減少・人手不足が常態化するこれからの時代において、資本を外に漏らさず、地域内で価値を循環させる三豊市のモデルは、沼田市が持つ歴史・文化・自然・人材と組み合わせることで、十分に再現可能であり、むしろ沼田市ならではの独自モデルを構築するための土台になると確信する。今回の視察を端緒として、私は沼田市の文化芸術施策、若者支援、福祉、観光、産業振興の全てを「人をつなぎ、未来をつくる」という理念のもとに再設計し、行政が稼ぎ、地域が稼ぎ、市民が豊かになる新しい地域経営モデルを構築する提案へとつなげていきたい。